青い色の短篇集

片岡義男

中公文庫

中公文庫

青い色の短篇集

定価はカバーに表示してあります。

1998年7月3日印刷
1998年7月18日発行

著者　片岡義男

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)　振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Yoshio Kataoka

本文印刷 大日本印刷　カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 大日本印刷
ISBN4-12-203189-3　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

青い色の短篇集

片岡義男

中央公論社

目次

青い色の短篇集 7
紙の上にクレヨンで 47
それも姉が教えてくれた 81
彼は孤独を深める 121
別れた男のすること 159
そして私も目を閉じる 193

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

青い色の短篇集

青い色の短篇集

夕食は彼が作った。

「今日のきみは、この僕、神崎五郎の、ゲストだから」

と、彼は井上友美に言った。彼のその言葉を、彼女はそのまますんなりと受けとめた。彼がキチンで夕食を作っているあいだ、彼女は居間の窓辺に寄せた丸いカフェ・テーブルに向かって椅子にすわり、手紙を書いて過ごした。

七時前から夕食が始まった。夕食とその会話に、ふたりは二時間近くをついやした。彼の料理を井上友美は褒めた。出来ばえが気にいり、楽しく食べることが出来たからだ。

食後のかたづけをふたりで済ませた。そのあと、彼と彼女は、居間の丸いテーブルで差し向かいに椅子にすわった。

「ほんとに、泊めていただいていいの？」

友美が聞いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「どうぞ」
「出来ることなら、二、三日」
「それも、どうぞ」
「迷惑ではないのね」
「にぎやかでいい。美人は華やかだし、顔を見ているだけで、物語をいくつもそこに読むことが出来るから。遠慮はしなくていい。僕もきみをお客さん扱いにするのは、いまの夕食で終わりだ」
井上友美は同性の友人とふたりで部屋を借りて住んでいる。その友人に事情が出来、少なくとも一週間は部屋を出ていたほうがいい、と友美は判断した。今日がその初日だ。神崎五郎が一軒の家にいまはひとりで住んでいることを知っていた友美は、居候させてもらえないかと、今日の午後、この自宅にいた彼に電話で頼んだ。神崎は快諾した。だからいま、井上友美はここにいる。
「間取りを見せて」
と、友美は言った。
「間取り？」
「このお家の」
「夕方、きみがここへ来たとき、見たじゃないか」

「もう一度」
「何度でも、どうぞ、見ればいい」
「面白い間取りだから」
という友美の言葉を、
「ものすごく単純な間取り」
と、神崎は言い換えた。
「その単純さが、面白いの」
「ぜんたいは、やや長めの長方形だね。その長方形が、基本的には六つに仕切ってある。それだけのことさ」
友美は椅子を立った。神崎も立ち上がり、
「あそこから見ていこうか」
と、彼は玄関を示した。
居間と食事のためのスペースとのあいだに、あるいはそのふたつのスペースをつなぐ部分として、たとえばフォイアと呼ぶならそう呼べるようなスペースがあった。玄関のドアを入ると靴脱ぎがあり、その前がフォイアだ。
フォイアから食事のためのスペースに入り、そこから彼は友美をキチンに招き入れた。中央にある作業テーブルのかたわらに立ち、友美はキチンを見渡した。

「使いやすそうですね」
「こっちへまわると、ユーティリティだね。洗濯機があったりするところ。キチンに必要な道具その他のものは、すべてこのキャビネットに納まっている。キャビネットの裏にも収納があって、そこをとおって西の端に縦にふたつ並んでいる部屋の、どちらにも入ることが出来る。その手前に、ふたつめの浴室と洗面、そしてトイレットがある」
「よく出来てますね」
「長方形の西の端には左右にドアがあって、そのなかはどちらもおなじ大きさの部屋だ。南側が僕の書斎で、北側は僕の寝室になっている」
そこまでいき、ふたつの部屋をのぞき込んだあと、
「どなたが作ったお家なの？」
と、友美は聞いた。
「僕の父親。両親が住んでいたのだけど、彼らが引っ越したあと、姉がひとりで住んでいた。姉は仕事でヨーロッパに住むようになり、父親はこの家を壊して建て替えようとした。僕はそれに反対し、移り住んだ」
「お姉さんは、女優さんなのよね」
「日比野恵子。僕とは苗字も違うし、育ちかたがまるで異なっている。姉はほとんどフランスで育った。演劇を勉強してソルボンヌを出て、フランスで奇妙な映画にばかり出

演するようになった。日本ではロマン・ポルノに出たこともあるんだよ」
「きれいな人よ。ものすごく知的な雰囲気があって。映画は三本だけ見ています」
「フランスではイビーノ・ケイコと呼ばれている人の部屋を、きみが使えばいい」
キチンに戻ったふたりは、奥の出入口から居間の北側に入った。そこに立ちどまり、彼らは居間のぜんたいを南の窓まで見渡した。居間の中央に、ライティング・デスクとディレクターズ・チェアがあった。小説を中心として、文章を書いて生計を立てている神崎五郎の、ここが仕事場だ。
「僕は二十九歳のときから、ここに住み始めた。だからここはもう五年になる」
そう言った神崎は、居間の東側の壁を示した。
「端から端まで、あっさりと壁になっていて、そのまんなかにドアがひとつだけある。そのドアのなかが、僕を盛んに教育した姉の部屋だ。本来ならそこはマスター・ベッドルームだね」
「主寝室ね」
「マスターとは主だから」
妙に真面目にそう言った神崎に、友美は笑顔になった。友美とともに、彼はそのドアまで歩いた。
「どきどきしますね」

彼女が言った。
「なぜ？」
「あれほどに素敵な女優さんの、寝室だから。しかも、ほとんどフランス女優でしょう」
「フランスだからどうということはないんだ」
神崎はドアを開いた。明かりを灯けた。なかに入り、友美を招き入れ、部屋のぜんたいを彼女に見せた。
「南側がベッドを置くためのスペースになっていて、そのスペースは、この部屋という長方形の、ちょうど半分だね。ベッドの反対側のスペースでは、左右にクロゼットが振り分けてあり、そのふたつのクロゼットのあいだに、少しだけ奥に入ったところに、ドアがある。そのドアの向こうは、洗面、トイレット、そして浴室だ」
「ほんとに、ここを使わせていただいていいの？」
彼女の言葉をそのまま使って、
「ほんとに」
と、彼は答えた。
「この家の間取りは、僕も気にいっている。しかし僕の父親は、なんのためらいもなく、この家を壊そうとした」
「ノートに写します」

「なにを？」
「この間取りを」
「図面のコピーをあげる」
寝室の南側の壁には、おなじ大きさの窓が、間隔を置いてふたつあった。おなじ大きさの窓は、東側の壁にも、ひとつだけあった。
「姉は東側の窓のカーテンを閉じない。窓から差し込む朝の光のなかで目を覚ますのが、好きだから」
記述するかのようにそう言った神崎は、さらに次のようにつけ加えた。
「蠟燭（ろうそく）の光で風呂に入るのが、彼女は好きだ。いまでもそうだと思うよ。洗面台のキャビネットのなかに、いろんな種類の蠟燭がたくさんある」
間取りを見終わったふたりは、居間のカフェ・テーブルへ戻った。それぞれ椅子にすわり、ふたりは斜めに差し向かいとなった。
「日比野恵子さんは、おいくつだったかしら」
と、友美が聞いた。
「三十七歳」
その数字に、なんらかの思いを重ねているらしい友美の表情を、神崎は見た。
「きみは、いくつだっけ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com